

丸竹さん

郷里である滝ヶ原では坂本竹次郎氏のことを「丸竹さん」と呼んでいました。

滝ヶ原町史（滝ヶ原町々内会発行、昭和 46 年 9 月 30 日発行）の中で、「滝ヶ原立志伝」が記載されています。

この中で、坂本竹次郎のことが書かれています。

本名坂本竹次郎、明治 4 年三ツ屋坂本家に生まれた。



明治 23 年 9 月、若干 20 才を以て、明治新政府開発途上の北海道不毛の地に渡り、石狩の親分渡辺彦太郎の麾下となり、原始林の角取伐採の鉞（まさかり）を振り、山に寝、雪に臥すの艱難辛苦を嘗め、先人未踏の地開発の先駆者となった。



爾来 60 年堅忍不拔、七転八起の世路を生きぬき或は北海に汽船を失い或は天涯支那に航し然も胸中明朗磊落、異性千人切りを夢見てその 90%を完遂し、或は遊君花魁の墓碑に参じて懐古の泪を流す。

然も常に大望と信念に生き、特に王子製紙の「山出し請負」を始め坂本木材合名会社々長となり今日の大を築いた。

財を積んで財にとらわれず快活快潤、愛郷の念に富先には那谷小学校奉安殿を寄付し、昭和 10 年には丸竹橋を創設して村人の交通に便し、近くは牧村神社の境内改修、大幟樹立のため多大の浄財を寄せられた。



牧村神社入口



坂本竹次郎の石像

その敬神愛郷の誠意は里人敬慕の的となり昭和 23 年 9 月、境内の一角に坂本竹次郎氏の石像（彫師、牧野良重）を建てその面貌と美徳を永遠に伝えることとなった。



平成 20 年 10 月には下八幡神社が新築され、元の牧村神社も合祀された。
牧村神社から鳥居も移設されて現在に至っている

流送発祥の地を訪ねて

北海道沙流郡日高町から南へ行くと沙流川があります。

川沿いにはひだか高原荘があり、その中には沙流川温泉、地元の人や旅行者が多く訪れる場所でもあります。

沙流川の上流に国立日高青少年自然の家があり、その入り口近くの道路際に坂本竹次郎の「流送発祥の地」の石碑は建てられていました。



流送発祥の地 石碑



流送発祥の地 石碑

碑文

沙流川流送発祥の地

沙流川流域原生林の伐採・流送という大事業に挑んだ坂本竹次郎は、明治四十二年、始めてこの場所に材木を浮かべ、遠く太平洋岸へ送り出した。かつて「林業の町」として栄えた日高町発展の歴史の始まりである。

当時の流送は、切り倒した材木をいったん三号沢の堰でせきとめ、水量が十分になるのを見計らって一度に放流する。そして、散で流した材木を途中で筏に組み、流送夫がこれに乗って、沙流太（さるふと）（富川）河口まで送り届けたのである。流送夫を務めたのは、越中（富山）など本州各方面から雇われた熟練者達であった。

黄色い円錐型の傘を水にぬらして竿をあやつる越中衆の姿がよみがえるようである。

坂本木材株式会社創業一〇〇周年記念事業

平成七年九月建立

国立日高青少年自然の家から沙流川本流に架かる歩道橋を渡って沙流川を撮影しました。





沙流川上流側



沙流川下流側

沙流川の支流「三号の沢」で流送を行ったことを知ったのは北海道から戻り、資料を調べてからでした。

雨が降っていて人の気配すら感じられない山道を徒歩で調べる勇気もなかったのも事実ですが・・・。

今回は流送発祥の地を見てみたいのと石碑を写真撮影したいだけ、それ以外の目的もなく現地を訪れたのです。

雨の中であったが、どこかで熊が見ているのではという雰囲気の中で、この地方で流送作業に従事していた方々の度量に敬服すら感じ、この地を後にしました。

流送に関する資料を求めて

次の日、沙流川のことを気になっていましたので、沙流川の下流にある日高町立門別図書館を訪ね、「石川県から渡道し、沙流川で流送事業をした。坂本竹次郎に関しての図書はありませんか？」と図書館の方に尋ねると、「探しますから併設されている郷土資料館に流送に関する展示をみてきたら」といわれ資料館に。



日高町立門別図書館郷土資料館

資料展示の中に流送のブースがあり、大きな鋸や斧が展示されていました。
実物の大きさに驚きました。



流送についての掲示



実際使用された道具

図書室に戻ると、何冊かの図書があり、親切に流送に関する箇所には付箋まで貼ってありました。

その中で「坂本木材百年のあゆみ」という冊子もありました。

必要箇所のコピーを手に図書館を後にしました。

とても親切な対応に感謝しています。

図書館を後にして、沙流川河川敷を見たくくなりました。

沙流川を見てみたい



堤防からは沙流川の流れは見えません。河川敷がとても広いのです。堤防間の川幅は凡そ400m位あるのでしょうか。



上流側



下流側

さるがわせせらぎ公園と書かれた案内板がありました。
この案内図を見てもとても川幅が広いことが分かりました。
伐出した木材を筏に組んでこの川を下っていったのでしょうか。しばし感慨にふけりました。
今は流送を見ることもなく、当時のことを探すのも難しくなっていることを痛切に感じました。

第二章 坂本木材のあゆみ

単身故郷を後にした坂本竹次郎が坂本木材を設立し、世に坂本の名を知らしめた歴史を「坂本木材 100 年のあゆみ」から抜粋していきます。

坂本造材部の設立

明治 28 年、札幌大通西一丁目に於いて [金+] (かねほん) (金の文字の右側にカギカッコが付いた屋号) 坂本造材部を創業した。

竹次郎 24 歳のときである。

その後、屋号を㊦に改め千歳御料材の伐採に着手したのを手始めに明治 31 年には空知川の流送事業、三井物産の造材下請にも携わった。

王子製紙との出会い

苫小牧新工場の建設

明治 37 年 9 月王子製紙鈴木四郎専務一行は新工場候補地を求めて渡道、幾つかの候補地を調査した結果支笏湖の中から流れ出る千歳川が水力発電に最適であるとの判断から、新工場を苫小牧に選定した。

勿論、森林資源についても注意深く調査が行われていた。

王子製紙との初仕事

王子製紙の北海道における本格的な伐出事業は、明治 40 年漁御料林の払下げを受けた 2 万 9000 石を明治 41 年 9 月から翌年 9 月まで 1 か年間を事業機関として坂本竹次郎を請負人として実行されたものです。

造材後に漁川を散流し、千歳川出会太で 1 枚 300 石の大筏に組んで江別まで流送し、富士製紙の網羽で陸揚げ後、苫小牧まで鉄道で輸送するという手間のかかるものであった。

専属伐出請負業者に指名される

王子製紙苫小牧工場では明治 43 年 9 月の開業を控えて原材料の伐出請負人の選衝に苦慮していた。

王子製紙の山林請負は一河川一業者を原則としていたので、前人未到の最奥地である日高地域の伐出請負を誰に委ねるか、一攫千金の巨利を狙う輩もいるなかで、その人材を得られなくて頭を悩ましていたようである。

当時の王子製紙山林掛長の水島鉦四郎氏の目に留まったのが坂本竹次郎であった。

彼の人となりは事業を通してしばしば耳にしていた。ある日札幌の山形屋旅館に彼を呼び出し、その人物を観察したが、この一度の面接で「この男ならば困難を克服し必ず仕

し、この流域での造材は長く続いたのである。

集落の形成

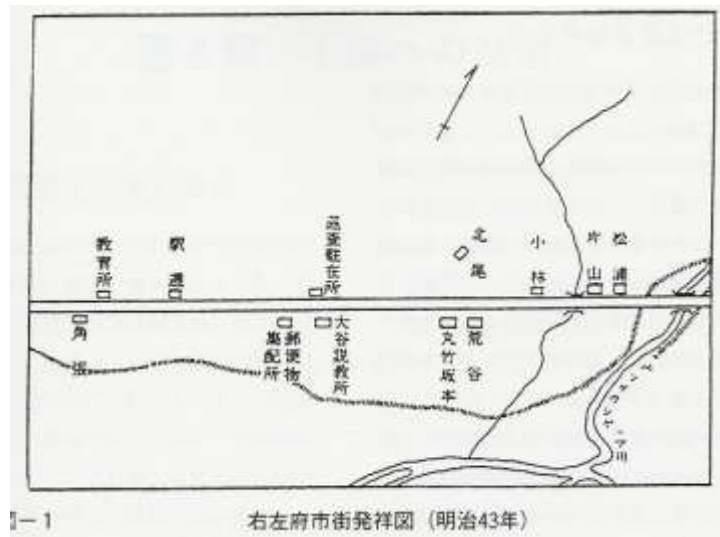
明治 42 年、竹次郎がこの地区の伐出事業に着手したころ、宮城県出身の鹿野長三郎という人物が後を追うように入植した。

翌 43 年には 20 名の宮城県人が鹿野の後を追うようにして萩付や新冠から移住し、宮城県人部落を形成させた。

大正 5 年には 75 戸を超える一大集落となり、岡春部が幌去地区（現在の平取町）の要となっていた。

それは王子製紙を後ろ盾とした坂本木材が造材、運搬、道付、土入巻立、流送等で多くの人、馬の仕事が十分にあり、飯場の野菜等の買い上げも集落全体の支えとなり、経済が潤ったからでもあります。

開拓の初期はどこでも同じで、生活に最も必要なものから要求され作られていく過程があるようで、右左府（うさつぶ、現在の日高町）も日常必需品店と産婆、ついで学校、駅通の順で街が形成されていった。



㊦坂本造材部の事務所兼荷揚倉庫が雑貨屋北尾商店向かい側に設置されると、これをきっかけに道の両側に幾つもの小屋掛けが並び、造材景気をあてこんだ色々な、にわか商家が建並び、市街地らしきものが形成された。



本州から繰り出して来た流送夫や杓夫と馬夫、あるいは土場巻連中が何かのはずみで一杯機嫌のドットコや鳶を振り回すこともあったという。

やがてこれらの稼人と一般農民との生活安定の為に巡査駐在所の設置され、居酒屋が坂本事務所のすぐ隣に出来、五分芯ランプを囲んで毎夜のように嬌声、絃歌が流れるようになった。

また、教育所近くには右左府駅通所も官設され、明治 43 年の暮れまでには活気あふれる市街地となった。

翌 44 年には、大谷派説教所が設置され、新市街地はこの形で発展したが、坂本造材部の事業範囲も拡大されと右左府地区（現在の日高町中心地帯）へと移っていった。

『およそ 85 年前、一介の造材師坂本竹次郎が日高町の発祥を促したことを考えると誠に感慨深いものがある』と社史で述べている。

昭和 18 年右左府村が日高村へと改称され、岡春部も富岡地区に包含された。

山火事の延焼防止に活躍

明治後期の入植以来、北海道の各地はよく大火に見舞われた。

坂本竹次郎が岡春部に入山した頃の明治 43 年隣町のニセウ川流域から出火し、火勢は岡春部にまで拡大し、被害面積千余町歩に及ぶ大山火事となり、その後も各地で火災が発生するたび、坂本造材部は官林への延焼防止に大活躍した。

これらの多くは入植者が開墾のため下草等を燃やした火の不始末が原因であった。

代表的なものは昭和 6 年旧節句の大火であり、ベンケの一農家の火入れから発生したこの山火事は市街地近くまで押し寄せ、いつ果てるとも知らぬ猛烈な火勢で貴重な原始林を火の海と化し、ついには占冠地区にまで及んでその被害面積は数千町歩といわれた。



又、昭和 22 年には日高村市街地から出火、ついには村役場までも類焼する惨事で 215 人の被災者を出した。

中には坂本木材の従業員も含まれ竹次郎は罹災者の援護はもとより、村の復興にも積極的な支援を惜しなかつたという。

沙流事業地の各山

後の社長山下暁也が沙流事業地の冬山伐採三号現場に入山したのが大正 2 年の 10 月である。

この年の現場は、一号滝の沢（山頭、脇田米次郎）二号千呂露（山頭、畠山仁八）三号パンケイトラシナイ（山頭、谷本亀吉）四号パンケイトラシナイ（山頭、今井喜一郎）の4か所でその後も基本的にこれらの個所は長く続き坂本造材部の年間扱量は15万石を下らなかった。

その当時王子製紙の日高総監督は波多野忠治氏で後の王子製紙副社長小林準一郎氏は四号の主任であったが、小林氏は大正4年、当時の山林掛長（現山林部長）に抜擢された。

事業年次中、大正13年には糠平（額平）75林班が地形不良のため休山したが、翌14年再開、その秋より新たに額平川支流宿主別に入り、昭和14年までの長きにわたって継続したのである。



十勝への進出

沙流川以外の地域での流送についても述べておきたい。

大正2年より十勝地方の釧路国陸別字訓根別川で毎年5万石程度の伐採流送を数年間行なった。

大正3年には本店を札幌市北2条西3丁目に移転した。

この年に第一次世界大戦が勃発した。

明治天皇が崩御され国内の産業が沈滞し、小樽港では滞貨の山が出来た。

材価も一時的には暴落したのだが、大戦の進展と共に好景気となったため、諸物価が高騰するのに伴い木材価格も高騰を続け、大正8年には針葉樹用材立木1石あたり80銭9厘、広葉樹用材立木86銭8厘（国有林払下げ価格）となり、3年前と比べ針葉樹材で5.8倍、広葉樹材で4.8倍という暴騰となった。

一方、労賃も上がり同期間で平均1.52倍となった。

大正4年、十勝国美里別流域の事業に着手し事業を拡大していった。

大正7年第一次世界大戦が終結したが、大戦の荒廃から回復していない国々の購買力も追いつかず生産過剰となった農作物や輸出品が滞り、輸出不振となり一挙に世界同時不況が来るのである。

大正9年世界恐慌となった日本であったが、王子製からの要請で十勝国美里別川流域の伐出、流送事業に着手した。

主として糠南地区を中心に年間10万石位を伐採し、その材は長く本別網羽で陸揚げをした。